

あとがき

金森 修

本書は『昭和前期の科学思想史』（勁草書房、2011）の続編である。『明治・大正期の科学思想史』も追って公開される予定であり、西洋篇として既に公開されている『科学思想史』（勁草書房、2010）と併せれば、しかもそれぞれが一〇〇〇枚前後の大冊だということを考えるなら、全体として、我が国の科学思想史の過去や現状を俯瞰する上で基礎的な資料になるはずである。

（中略）

(中略)

最後の第七章は私自身が執筆したものだ。一言でいうならそれは、最後の方で原発問題などにも言及するが、主として、戦後に成立した〈原爆文学〉の大まかな流れを代表的な作家や作品に寸評を与えながらほぼ通覧的に跡づけたものである。それは個人や個別作品の掘り下げを目的とはしない。しかも、この論攷は〈科学思想史〉という学問領域に包摂されるかどうか微妙なものでもある。原子爆弾を投下され、即死、関連症状による早期の死だけでなく、内部被曝による緩慢な死という特殊な経験をせざるを得なかった被爆者たち、またはその証言者たちの経験が元にあるという意味では〈科学〉と無縁ではないとはいえ、その本質は科学そのものではなく、原爆という未曾有の経験を通過した人間たちの苦悶や自省の文学的表象が中心にあるのは明らかだからだ。ただ、元々〈科学思想史〉という学問の内包と外延は古典的な学問領域よりは曖昧模糊としている。しかも私の最近の関心が〈科学思想史〉の境界領域や辺縁領域に向くという外向的志向性を強めているという個人的事情もある。その意味でいわば広義の科学思想史の一試行として、この章を本書に組み込むことも許容されるはずだと考えた。ただ、自分の論攷をこれ以上纏め続ける作業には魅力を感じないので、この辺で切り上げておく。

* * *

既によく知られた歴史的な逆説がある。古代史や中世史に比べれば実証的価値の高い資料が存在する現代史の方が歴史記述がし易いはずだが、実際には歴史記述は現代に近づけば近づくほど異質な困難の前で足踏みをしてしまうという逆説だ。例えばこの二〇年間の日本史を書けと単に漠然といわれれば、たいいていの人なら途方に暮れ、その困難さを十分に味わってから、何かをなんとか書き留めることになるはずだ。仮に当人の専門領域だけに

絞つたとしても、そう簡単なことではないはずだが、ましてや、領域を指定されずにこの二〇年間で書き残すに値する事件や判断に触れながら歴史を構成しろという課題は、極めて困難なのだ。しかも、テーマや人物の選択行為だけでなく、それらに対する評価は現代に近いほど未確定なままに留まり、何を取り上げるか、取り上げたとしてそれをどう評価するか、それが近未来の我が国にどのようなインパクトをもつかなど、いろいろな論点について、それを書く人の知識水準、知らずに透過される好き嫌い、度量の程度、人生観の深淺などが、すべて晒される。歴史記載を試みる〈歴史家〉は、いわば全存在を賭けた一種の冒険をしなければならぬ。さすがに現在では、宮刑を受けた司馬遷のように直接的暴力を耐えねばならないような政治的状況にはない。だが、歴史家が〈愚かなこと〉を書いて信用を失う時、その作業がその人にとって重要であればあるほど、それはその人にとって半ば社会的な死を経験するようなものになる。とにかく、一般に現代史を書くことには固有の困難が存在するのだ。

領域を全く確定しない〈現代史一般〉に比べれば、まだ一応、〈科学思想史〉という区切りがある分、テーマ選択の茫漠さはかなり限定されたとはいえ、上記のように科学思想史という学問自体がもつ曖昧さのゆえに、対象時期が決まれば、テーマ選定も、大多数の意見の収斂が予想される形で順当に決まるといふような性質のものではなかった。本書の設定時期が前提条件になる場合、なぜ、あれこれは扱われないのか、と不審に思われた読者も多いはずである。また、これも半ば自明のことながら、編者の嗜好や知識限界という個人的バイアスもある。ただ、別に居直るつもりはないが、かなり大部の本とはいえ、一冊で特定領域の数十年分の歴史を網羅できると考える方が無理ではないだろうか。歴史書は、龐大なネットワークの一部としてしか存在し得ない。人間の文化は、それほどまでに奥深く、厚いのだ。その意味で、あとかき冒頭で本書は当該領域の基礎的資料になるはずだと豪語してはいたが、それでも多くの限界を抱えていることはいままでもない。これを踏み台にして本書を敷衍する、または補完する新たな著作群が出現する契機になればよい。いまはただ、そう思うだけだ。

また実をいうなら、現代史の困難は重々承知の上で、未刊の『明治・大正期の科学思想史』、既刊の『昭和前期の科学思想史』、現行の『昭和後期の科学思想史』と来れば、その余勢を駆って、過去ほぼ三〇年弱の期間に相当する当該分野の〈現代史〉、例えば『現代日本の科学思想史』や『平成の科学思想史』なるものも構想可能ではないか、と考えたこともあった。その場合には、誰もが思うようにまずは情報工学の爆発的な進展とその社会的・思想的含意を掘り下げることが最重要テーマの一つになる。しかし、私自身がこの分野の知識に疎い上に、あまりに重要すぎ、広く社会に浸透しているせいか、〈情報工学〉全般という切り口で科学思想史的記述をできるような人を思いつくことが叶わなかった。またナノテクノロジーのような重要分野も、技術的解説に終始するのならともかく、その歴史的・思想的含意を剔抉できる人もそうはいないように思われた。他方で、現代宇宙論の佐藤文隆や松井孝典、ロボティクスの石黒浩や浅田稔、生命論の多田富雄や福岡伸一、薬理学を超えた一般的議論に踏み込む清水博などの重要な論者、科学論で異彩を放つ池内了、進化論の進展に伴いその自然主義的発想を文化批評に拡大した長谷川眞理子、重厚な科学史的作業で耳目を惹いた中山茂や山本義隆のような思想家を対象にした個別論文は興味深いだろうという予想は付く。さらにこの時期にその多様な問題群への応対によって急速に重要性を増している〈生命倫理学〉の科学思想史的な掘り下げ、近年哲学界で今まで以上の隆盛を誇る〈科学哲学〉の科学思想史的吟味など、幾つかの興味深い論点も思いついた。さらにいうなら、私自身は〈ポスト三・一一ワールド〉を語ることに有意味だと考え、その意味の熟考の果てに出現する新たな文明的科学論を構想すべきだと考えているが、現状の日本はそのような方向性を指示してはおらず、何故それが実現できないのか、その頓挫や成立不可能性の社会的・思想的根拠を探るという作業も重要だと考えている。というように、幾つかの難点を抱えながらも、この種の主題設定の少なくとも一部を実現した科学思想の現代史は不可能ではないとは、いまでも思っている。

しかし、それでも私を躊躇させるものがある。それは科学と技術が基礎と応用に対応する、いやそうではない

云々という比較的素朴な科学論・技術論の分節・対峙関係の分析段階を経て、科学と技術の融合が進み、〈科学技術〉を語ることが普通になるという状況なら既に〈昭和後期〉には実現していたし、その特徴の分析も数多く存在する。しかし、この三〇年弱をより強く特徴づけるのは、科学と技術、産業、さらには政府が一体となった産学複合体（より正確には瀬戸口が述べるように産学複合体）という総体の存在こそが、諸科学や諸技術の個別的具體相を決定づける割合がますます大きくなっているという事実である。どれほど科学者・技術者個人が違うことを信じようと、彼らの作業の根底に、政治的・産業的（軍事的も）要請という強力な規定因子が介在することは否定しようがない。現代科学論は科学政策論、科学経済論、科学政治学、軍需産業史などの総体と対峙し、その総体内部の少なくとも一部に切り込むだけの射程や深さをもつものしか、その名に値しない。だが、そうなると、例えばある個別科学の様相を辿ろうと思っても、それが内在的には一見どれほど巧みにみえようとも、それをことさらに〈科学思想史〉という切り口で設定することにどれほどの意味があるのか、はなはだ覚束ないことになる。例えば、ある科学技術の隆盛が、それがもつ科学性の精度の度合い、技術的実現の程度だけではなく、それを巡るマーケティングの巧拙までも考慮に入れなければ正確な評定ができないような状況が一般的になる時、それをことさらに〈科学思想史〉という思想的・哲学的側面を重視した切り口で見ることの意味は、まるで自明なものではなくなるのだ。科学思想史は、元々ふわふわとした浮動性や鶴つる的性格のせいでも、一度として学問世界の中で主流の地位につくことはなかった。ともあれ、それがよちよち歩きながらもなんとか続いてきて、科学技術の日常世界への浸透度の深さから考えて、その成長に有利な条件が整ったと思えた矢先に、科学思想史という切り口自体が現代社会のあり方はそぐわないものになりつつあるのではないか。私にはそう思われてならない。科学思想史は、一度として完全開花を迎えることもないままに、いつしか古色蒼然としたものに成り下がる。それが、既定路線のような気さえする。だから、本書『昭和後期の科学思想史』は、それでもなんとかこの学問分野の体裁を整わせ得た最後の試みの一つ

になるかもしれないとさえ、私は考えている。もちろん、この予想が外れてくれることを願うと共に、科学思想史の問題関心を科学政治学的なテーマ設定と融合させることができる真に豊かな才能の持ち主が出現する日々を待望するという一抹の希望も捨ててはいない。いずれにせよ、それは私自身には手の届かないものでありそうだ。

* * *

本書成立にあたっては、いつもながら勁草書房編集部の中嶋晶子さんのお世話になった。私の個人的事情も勘案して下さり、作成過程ではいつもに増して本質的な力添えを頂いたことを心から感謝したい。『明治・大正期の科学思想史』でも、再び彼女にご苦勞をかける予定である。

また、何よりも他の執筆者に感謝の意を捧げたい。私的理由のためにろくに準備会議さえ開くこともできなかった。それは会議の後の楽しい懇親会もほとんど共有できないということの意味していた。お一人おひとりのお顔をいま思い浮かべながらいまこの部分を書いているが、もし可能ならまた何度もお会いして、直接お礼を申し上げたいと願っている。ストレスばかりが多いこの種の作業がどの程度報われるものなのか、それは分からない。それでもなお、本書に参加して下さった彼らのような人々がいるからこそ、とにかくなんとかここまで続けてこられた。この当たり前の事実を、改めて私は噛みしめている。皆さん、本当にどうもありがとうございます。

二〇一六年春分

金森 修